



原一男(はらかずお)

1945年 山口県宇部市生まれ、東京総合写真専門学校中退、1972年「さようならCP」監督・撮影、1974年「極私的エロス・恋歌1974」監督・撮影、1987年「ゆきゆきて、神軍」監督・撮影、1994年「全身小説家」監督・撮影、1998年 テレビドキュメンタリー「映画監督山田洋次」演出、2000年 ビデオ作品「学問と情熱 高群逸枝」監督、1998～2000年 早稲田大学・文学部客員教授を務める、2005年「またの日の知華」監督

「ばかにすんな」 原一男写真展

1969年7月19日、土曜の半ドンが終わった私は、勤め先の六本木から、銀座松屋デパート前のニコサロンへと、自転車を走らせた。その頃手放さなかった「美術手帖」には、肢体不自由児たちの写真展、撮ったのは24歳の原一男、とだけしか載っていないが、私は黒々と鉛筆で丸を付けていた。絶対、見に行かなければ、と。私自身はボリオ(小児麻痺)、映画作家を志して上京してきたばかり。街は70年代幕開け前夜の、渾沌とした熱気にあふれていた。

ニコサロンのしんとした空気の中、モノクロの連続写真に向き合っていた私は立ち尽くした。少年たちの視線と、カメラの視線が、まっすぐに、こちらを突き抜けてくる。この写真を撮った人に会いたい、と思った。会って、一言、言いたかった。「まっすぐの視線」が、気になってしかたなかったのだ。

目の前に現れた原一男は大きかった。見上げる程に。10歳以上も年上に見えた。観念過剰、生意気のでっぺんにいた私は、何を口走ったのだろうか。ただ、ひたすら、一足ごとに、傾き、揺れて、崩れてゆく、生身の質感を、ぶちまけたにちがいない。彼は、あるがままの丸ごとを受け止めてくれた。障害者じゃないのに、どうしてこんなに障害者の事が分かるんだろう？

この出会いから2年後、「さようならCP」の撮影はスタートした。ゆあーん、ゆあーん、ゆあゆん、幾つかの時代が過ぎて… いま、ここに、その写真展が再現されることになった。あの日の、あのまっすぐな視線に、もう一度真向き合おうと思うと、胸騒ぎが抑えられない。

疾走プロダクション・プロデューサー 小林 佐智子

会期：2005年3月22日(火)～4月24日(日) *月曜休廊

時間：12:00～19:00 (最終日17:00まで)

*4月9日(土) 原一男トークショー & 「さようならCP」上映会開催予定 *詳細はwebをご覧ください。

*3月26日～ シネ・ヌーヴォー(06-6582-1416)にて最新作「またの日の知華」公開予定

*当ギャラリーにはエレベーターがありませんので、車椅子でお越しの場合は事前にご相談ください。

オープニング写真展「ばかにすんな」のご紹介

「極私的エロス・恋歌1974」、「ゆきゆきて、神軍」、「全身小説家」など寡作ながらも、映画史を語る上で重要な作品を製作し続ける映画監督・原一男。

原一男が映画監督として活躍する以前、フォトジャーナリストを志す時期がありました。養護学校の介助職員として働きながら、その学校に通う子供たちを撮りためた写真を、1969年、銀座ニコサロンで発表しました。

原一男初監督作品となる「さようならCP」は、写真展「ばかにすんな」を終えた原が、「写真ではなく、もう一度映画でやってみよう」という思いから撮られた映画です。この写真展がなければ、映画監督・原一男も誕生していなかったかも知れません。

その原一男監督のターニングポイントとなった作品を、原監督にご協力いただき、「gallery 176」のオープニング写真展として、35年ぶりに展示する事になりました。

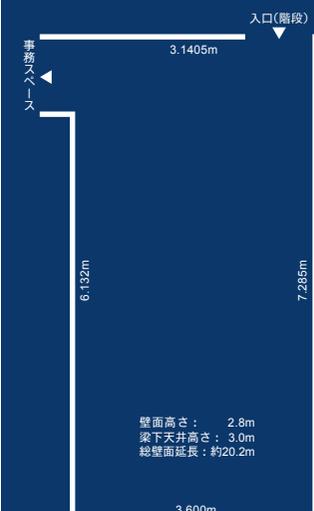
gallery 176 とは？

2005年3月、大阪・豊中に誕生した、写真・映像をメインにした新しいギャラリーです。中国、韓国を始め、アジア各国の作家に目を向けたギャラリー運営を目指しています。



阪急宝塚線服部駅下車徒歩1分、池田銀行南隣

>> g-176.net



ギャラリー概要

使用期間・時間：火曜日～日曜日の6日間(月曜休廊)
12:00～19:00 (最終日17:00まで)
搬入：日曜日 19:00～、搬出：日曜日 17:00～19:00
使用料：115,500円(税込)
設備等：照明(ハロゲン球)50W×26個(調光可能)、
アルミフレーム16"×20"(393×508mm)黒枠25枚
*詳細については、お気軽にお問い合わせください。

gallery 176

>> g-176.net

gallery 176

561-0851 大阪府豊中市服部元町1-6-1 tel/fax: 06-6866-2271